

「考動力」作文コンテスト・高校生の部

発行日 平成 26 年 3 月 31 日（月）
発行元 関西大学教育推進部
ライティングラボ
林田 定男・小林 至道
西浦真喜子・吉崎 裕子

関西大学教育推進部は伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「考え・表現し・発信する力を培うライティング／キャリア支援」の高大連携事業および広報活動の一環として、「考動力」作文コンテストを開催しました。コンテスト開催は初の試みでしたが、高校生の部と大学生の部とを合わせて、690 作品の応募があり、第 1 回目のコンテストとしては十分な規模となりました。応募作品の内訳は、高校生の部 598 作品（エッセイ部門 354、ショートショート部門 244）、大学生の部 92 作品（エッセイ部門 76、ショートショート部門 16）でした。多数のご応募、有難うございました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

ご応募くださった作品は力作揃いで、甲乙つけ難く難航しましたが、審査員 11 名が慎重に議論を重ねました。結果として、高校生の部ではエッセイ部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、ショートショート部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、特別賞 1 作品、また、大学生の部ではエッセイ部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、ショートショート部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、をそれぞれ選出するに至りました。

審査全体の感想をひと言でいえば、「らしさ」が溢れていたということです。高校生は高校生のそれ、大学生は大学生のそれを良くも悪くも感じました。

ここでは、高校生の部の受賞作品と講評を部門別に述べてまいりたいと思います。

エッセイ部門・受賞作品と受賞者

最優秀賞

「幸せ度数の高い社会」寺田有希さん（関西大学第一高等学校 1 年）

優秀賞

「幸せ度数が高い社会」稲田 雛さん（関西大学第一高等学校 1 年）

「悩むことで前に進む」下川悠奈さん（関西大学北陽高等学校 2 年）

【エッセイ部門講評】

高校生の部のエッセイ部門 354 作品に対する審査は、明確性、論理性、普遍性、独創性の 4 つの観点から行いました。客観性を意識してもらいたいということが、審査後の率直な感想です。応募された作品の多くは、筆者の経験に基づいた意見を述べた作品でした。たしかに、エッセイは自分の意見を述べる必要があります。しかし、自分の意見を述べる

にあたって、不可欠の要素があります。それは、客観性です。客観的な根拠もなく、自分の経験だけで自分の意見を述べるのは感想文で、エッセイと呼ぶことは困難でしょう。みなさん方が、すばらしい経験をされ、すぐれた意見を持っておられるということは十分理解できましたが、眼前にある作品をエッセイとして評価するには客観性を求めてしまうということです。

それでは、エッセイ部門の受賞作品を見ていきましょう。最優秀賞の寺田有希さんの作品は、資料を使って具体的かつ論理的に文章構成がなされていることが評価されます。寺田さんは、「幸せ」ということばの定義から考えます。「幸せ」とは何かを語ることは、容易なことではありません。物欲が満たされることが「幸せ」であるように考えがちです。しかし、物欲は際限ないものであるから「幸せ」をはかる尺度につながらないということ、を、「世界幸福度レポート」を踏まえて具体的に指摘しています。そのうえで、「発展・成長を希求する心」と「足るを知る感謝する心」のバランスを保つことが必要だと述べておられます。

「世界幸福度レポート」で、幸福度 1 位のデンマークの消費税が 25%であることなどに言及されていますが、今後、何に対して消費税が課されているか、他の税金はどうなっているのか、さらに社会福祉制度の充実が「幸せ」とどう関係するのかということを追及されると良いでしょう。

優秀賞の下川悠奈さんの作品の評価すべきポイントは、明確性、普遍性です。文章構成はもちろんのこと、「考動力」という難しいテーマにご自身の体験が、うまく絡んでいます。やや主観的な記述も見られますが、「悩みはやる気を出す道具」、「悩み」こそが「考動力」の源、そのポジティブなメッセージに審査員

も勇気づけられました。

同じく優秀賞の稲田雛さんの作品の評価すべきポイントは、論理性、普遍性です。ブータンの「国民総幸福量」の提示しながら、「幸福度の可視化」の必要性を説き、日本における「幸福度の可視化」の例として、荒川区の「GAH」を紹介し、「社会的な満足」の重要性を述べています。勉強のあとがうかがわれ、うまくまとまっていますが、結論部分でもう少し踏み込んだ記述が欲しかったように思います。

では、受賞作品とそれぞれの方からいただいた喜びの声をご覧ください。

「考動力」作文コンテスト審査員

田 中 俊 也（教育開発支援センター長・文学部教授）
中 澤 務（大学間連携共同教育推進事業取組責任者・文学部教授）
三 浦 真 琴（教育推進部教授）
岩 崎 千 晶（教育推進部助教）
林 田 定 男（教育推進部特任助教）
小 林 至 道（教育推進部特任助教）

西 浦 真 喜 子（教育推進部特任助教）
佐 々 木 知 彦（教育開発支援センター研究員）
仁 村 万 喜 子（学事局授業支援グループ）
竹 中 喜 一（学事局授業支援グループ）
宮 田 将（学事局授業支援グループ）

【エッセイ部門最優秀賞】
幸せ度数の高い社会
関西大学第一高等学校1年 寺田有希

私は「幸せ度数の高い社会」を考える上で、「幸せ」とは何か、つまり「幸せの定義」を確認しなければならないと思います。人それぞれ、何を以って「幸せ」だと感じるのかは様々だと思うからです。

たとえば、お金や物が沢山あって豊かな生活を送ることに幸せを感じる人もいれば、飢えに苦しめない程度に食べることが出来れば幸せと考える人もいるでしょう。また、争いがなく、平和で安定した社会こそが幸せと定義する人も多いでしょうし、自分の好きなことに熱中していればそれだけで幸せと認めている人もいます。このように考えていくと、「幸せ度数の高い社会」を実現するためには、「お金や物資が沢山あり、争いが無く平和で、自分の好きなことに没頭できる社会」と、人間の欲望の

全てを満たす事が必要になってくるかのように思えて仕方ありません。しかし、本当にそのような社会が「幸せ度数の高い社会」なのでしょう。

今年コロンビア大学地球研究所が発表した「世界幸福度レポート」では、世界で最も幸福度の高い国はデンマークで、続く2～5位は順にノルウェー、スイス、オランダ、スウェーデンの順になっています。それならばこれらの国々は先ほど私が述べたような条件をクリアしているのでしょうか。また、日本は43位と低位にランク付けされていますが、その理由は先ほどの条件を満たしていないからだと言えるのでしょうか。決してそうではなく、どの国にも貧富の差があり、それぞれに国民は懸命に生きていると思います。1位のデンマークでは、消費税率が25%です。本当に幸せなのかと耳を疑うような数字ですが、これが成り立っているのには社会福祉制度が関係していました。必要なときに必要なものを手に入れることができるのはも

ちろん、医療費や小学校から大学までの学費が無料なのです。ですから、人間の欲望を満たす「条件整備」が幸せの根幹では無いように思います。また、人間は1つの条件整備が出来、満ち足りた瞬間に、次なる「満足」を望むようになるとも思います。

仏教の世界では「知足」という言葉があり、「現状の自分がおかれた環境に感謝し満足する」という意味だそうです。これまでの科学や経済の発展は、人間本来が持つ「追い求め、希求していく」欲求があったからだだと思います。成長を希求する心を失った人間は墮落すると思いますが、どこまでも際限なく欲望を持つことは、結果的に、「幸せ」を味わえない人間を育てるような気がします。

「発展・成長を希求する心」と、「足るを知る感謝する心」が、車の両輪のようにバランスを保つことが出来たとき、より多くの人が「幸せ度数の高い社会」だと感じられるのではないのでしょうか。

寺田さんの喜びの声

今回作文を書くにあたり、「幸せの定義」について改めて考えました。やはり人によって「幸せ」の感じ方は異なります。その中でより多くの人々が、「幸せ度数の高い社会」だと感じることができるのは、「希求する心」と「感謝する心」のバランスが保たれたときであると考えました。そのため人々は、人間本来が持つ欲望を追求し、周囲に感謝をするという事を忘れてはいけないと思います。

このたび、最優秀賞という身に余る賞を頂き感謝しています。ありがとうございました。今回の受賞を契機に、「書く」力を伸ばせるようにさらに精進したいと思います。

【エッセイ部門優秀賞】
幸せ度数が高い社会
関西大学第一高等学校1年 稲田 雛

「幸せ度数が高い社会」とは、どのような社会のことを指しているのだろうか。お金がたくさんある。大きな家に住んでいる。好きなものが食べられる……。様々な例が浮かぶが、はっきりと断言し難い。そもそも、幸せ度数が高い社会とはどのような状態の社会のことを指すのだろうか。

二年前に話題になったブータンの例で考えてみよう。ブータンが有名になった理由として「国民総幸福量（GNH）」が多いことが挙げられる。国民総幸福量とは、経済成長を重視する姿勢を見直し、伝統的な社会・文化や民意、環境にも配慮した「国民の幸福」の実現を目指す考

え方のことで、その背景には仏教の価値観があり、環境保護、文化の推進など4本柱のもと、9つの分野にわたり、睡眠時間、植林したか、医療機関までの距離など72の指標が策定されている。これはブータンの独創的な尺度であり、国民の約97%が「幸せだ」と回答している。ブータンでは、この国民総幸福量を基本方針とする独特の政策をとっている。例えば、医療費と教育費は無料で、国内へのたばこの持ち込みや高山への登山が禁止。公的な場所での民族衣装の着用を義務化。国土の森林面積の割合を60%以上を維持することを定め、森林の国有化など様々な政策が決められ、実際に施行されている。

こうした、ブータンのように幸福度を「可視化」しようとする取り組みは世界各国に広がりつつあり、近年日本では、

地方自治体を中心に実施されている。そのひとつの例として、東京都・荒川区がある。荒川区は日本の自治体の中でいち早くこの取り組みを開始し、GAH＝グロス・アラカワ・ハピネスという「荒川区民総幸福度」の指標を設けている。区民がどれだけ幸せを感じているかについての研究を行っており、その調査結果を生かして区民の幸福度を高めていきたいとしている。

このように、ブータンと日本での幸福度についての例より、幸福は物質的金銭的な満足だけでなく、社会的な満足も重要になることが分かる。これからの自治体は、いかにして住民の幸福度を上げ、幸せ度数が高い社会を維持することができるかが大きな目標となるだろう。

稲田さんの喜びの声

「幸せ度数が高い社会」という題で作文を書き、幸せについていろいろ考えてみましたが、未だに幸せの定義がよく分かりません。なぜなら、幸せは目に見えないし、また人それぞれが異なった定義を持っているので、一つの尺度で計ることが出来ないからです。しかし、「幸せ度数の高い社会」を作るには、一人一人が何気ない日々の生活を幸せと感じることができ、またその積み重ねが全体の幸せに繋がっていくと思います。今回、この作文を書くことによって、普段深く考えることのない「幸せ」について考える機会を与えて下さったことに感謝します。

【エッセイ部門優秀賞】 悩むことで前に進む 関西大学北陽高等学校 2 年 下川悠奈

「今日こそ声をかけよう。」と意気込んだのに、いざ好きな人を目にするとやっぱり無理だと諦めたり、勉強をして次のテストは良い点をとろうとしたが結局やらなかった、というような経験を誰しも一度はしたことがあるだろう。そしてそんな時、私達は「ああ、自分は何て情けないのだろう。」と悩み、自己嫌悪に陥ることだろう。

では、一体なぜそんな風に思ってしまうのか。「考動力」はどんな物事を成すのにも必ず必要な力だと、私は考えている。なぜなら、私達はたとえ自分が意識していない時であろうとも、常に考え、行動して生活しているからだ。しかし、

先ほどの例が示すように、「考動力」を十分に発揮できなくて悩むことがよくある。そう悩むのは私達が物事を成そうとする時に、私達の頭の中でもっとよく考え、動かなければという思いが巡っているからに違いない。つまり「考動力」には、とにかく前へ進まなければならないというイメージがあるのだ。だから、考動できない自分に不甲斐なさを感じ、思い悩んでしまうのだろう。

しかし、私は思い悩むことは物事を成すため、すなわち「考動力」を働かせるためには良いことだと思う。悩むということは、静止や後ろ向きに逆戻りのイメージがある。だから一見、悩むことは、「考動力」を阻害すると考えている人も多いかもしれない。実際、私も昔はそう思っていた。しかし、中学校時代の先生が「私は不安があるからこそ頑張ること

ができた。」とおっしゃっていたのを聞いて、考えが変わった。私達が悩む多くの原因は、不安や悔しさを抱えていることにある。「考動力」とは、むしろそのような不安や悔しさを原動力とするものなのではないか、と私は思う。つまり、悩みはやる気を出す道具なのだ。不安や悔しさをかき消すために私達は、次にどうすべきかを考動することができる。それが頑張る糧、すなわちやる気となる。悩みと向き合うことではじめて、物事を成すための努力ができるのである。そしてその積み重ねが、私達の中の「考動力」を伸ばしてくれるのだろう。

だから、ずっと前に進んでいかねばと張りつめる必要はない。悩んで、自分を一度見つめ直すことが、より自然に、前へと進める方法なのである。

下川さんの喜びの声

自分がこんな素敵な賞を頂けると思っていなかったのが本当に嬉しいです。それと同時に、選んでくださった方々にとっても感謝しています。私は「考動力」の大切さを知り、いろんな人に自分の考えを伝えたいと思ってこの作文を書きました。だから、これからもこの考えを持ち続けて、自分らしく「考動力」を身に付けていきたいです。

【ショートショート部門講評】

高校生部のショートショート部門 244 作品に対する審査は、全体的な構成、伏線とオチ、表現力、独創性の 4 つの観点から行いました。審査後の率直な感想は、「学校」をテーマにした作品が多く、また「夢オチ」が多かったということです。それに加え、エッセイとの区別が見られないような作品も散見されたということが記憶に残りました。ショートショートは非常に短い小説であるということを憶えておいてください。では、小説を書くということが、学校の勉強につながるのかという疑問を抱いた方もいらっしゃることでしょう。文章が上達するためには、繰り返し書くことが必要です。書かなければ、文章はうまくなりません。それに加え、ショートショートを書く際は、伏線、オチといった要素をストーリーの中に適確に配置することが求められます。文章の構成を考える練習にもなるのです。つまり、たとえ小説であったとしても、書くことが文章一般の上達につながるということです。

ショートショート部門・受賞作品と受賞者 最優秀賞

「秘密」山田真里有さん（関西大学北陽高等学校 2 年）

優秀賞

「学校」石川怜子さん（関西大学第一高等学校 1 年）

「時計」佐藤菜花さん（関西大学高等部 1 年）

特別賞

「小さなハプニング」爲 あゆ美さん（伊丹市立伊丹高等学校 2 年）

それでは、受賞作品を見ていきましょう。最優秀賞の山田真里有さんの作品の評価すべき点は、何といてもその表現力の高さです。不思議な空気感がありました。ストーカー被害を受けている女性がいた。実は、そのストーカーは……。欲をいえば、作品のオチの部分にもうひとひねり欲しいところでしたが、文体（テンポ）には工夫がみられました。

優秀賞の石川怜子さんの作品は、星新一の世界を思わせる作品でした。題材の独創性は措くとしても、「学校」というテーマにうまく合致し、伏線が有効に働いていることを評価しました。

同じく優秀賞の佐藤菜花さんの作品

は、安心して読める作品でした。話のオチは想像できましたが、うまくそこにストーリーが展開しています。作品の細部で表現に工夫を要する部分もありましたが、全体的な構成の完成度を評価しました。

特別賞の爲あゆ美さんの作品は、作文コンテストの宿題をうまくテーマに絡めた作品でした。良い意味で、第 1 回ならではの受賞作品といえるのではないのでしょうか。モチーフ選定のセンスに加え、オチに至る主人公の心の葛藤を描く部分の表現力を評価しました。

では、受賞作品とそれぞれの方からいただいた喜びの声をご覧ください。

【ショートショート部門最優秀賞】 秘密

関西大学北陽高等学校 2 年山田真里有

迫っていた。
人ごみの中、確実に。そっと振り返れば、
やはり「奴」がいる。
ここ数日、私はある男につきまとわれていた。うぐいす色の着流しを身に着け、細くて白い指先には煙管。そして長い前髪で顔ははっきり判らないが、まるで一人だけ時を超えたかのような、風変わりな出で立ち。
「ぱっとしないアンタが、ストーカー被害とはね。」
相談した友人には笑い飛ばされた。
が、被害者の私はいたって真面目である。

次の日は、ポストに一通の趣のある手紙があった。しゃれた便箋だった。それには美しい字で、私への思いが綴られていた。鳥肌ものである。無視を決め込んで破り捨てた。

ストーカーの迷惑行為に慣れ、ゴミ箱に未開封の手紙があふれ始めた頃。
ポストには可愛らしい和菓子が投函されていた。携帯電話には着信履歴も。付きまとう影がなくなっていたので、警察に届出を出していなかった。届けられる菓子が私の好きなものばかりで、気持ち悪くてゴミ箱に投入。差出人はもちろん、あのストーカーである。

ついには手首を掴まれた。貴重な昼食時間に、だ。彼は、知っているはずのない私の名前を紡いだ。柔らかくで、体に染み込むような、落ち着く声だった。
「傍にいるのも、だめなのかい？」
前髪から覗く、涼しげな目元。
栗色のガラス玉のような瞳。それが私を真っ直ぐに捉えて離さなかった。秀麗な青年だった。次に何かされたら、大声で喚いて警察まで引きずって行こうと固く決め込んでいた。
なのに、私は彼の言葉に無意識に首を縦に振っていた。

雨の夜だった。男と出会って数か月が経っていた。
その日、私は折りたたみ傘を忘れてしまったので、会社の裏口で雨宿りをしていた。

じめじめとした空気が肌にまとわりつ

くようだった。散り始めたアジサイを眺めていると、目の前の地面だけ雨が止んだ。何かと見上げれば、男が和傘を差して小さく手招きしていた。彼と二人で入った赤いそれは、ずいぶんと昔に私がなくしてしまったものとソックリだった。

蟬時雨が季節を感じさせる公園で、猫毛の彼は一本当に猫のように一うだっていた。無言でその前を通り過ぎた私。
「その指輪・・・。」彼は私を呼びとめるように、言った。
私の指先には、指輪があった。
「ああ、これ。机の引き出しの奥にしまってた・・・なんだか懐かしくて、つけてみたんです。」
これを、一体どこで手に入れたのか。
誰からもらったのか。
夏の暑さのせいか、思い出すのもおっくうで。とりあえず指にはめて家を出たのだ。
それを見た男は一瞬その美しい眉をしかめた。複雑そうな顔で私を見て、
「すみません。」と言うと、うつむく。
なぜ、謝るのか。意味がわからなくて首をかしげた。
「・・・？あの、それより、暑そうですけど・・・。大丈夫ですか。」
彼が意味のわからないのはいつものことだ。
いきなりの謝罪に戸惑いつつも、私は飲料水を手渡して帰宅した。

紅葉が色づく朝。私は早めに出社した。と、コンクリ塀の上の猫にちょっかいをかけている彼を見つけた。背の高い彼は、私を見つけると大人びたその白面に、あどけない笑みを浮かべた。
「おはようございます。」彼は上機嫌だった。猫を撫で回している。
「・・・どうも。」私は会釈で返す。彼の横にしゃがんだ。
「会社ですか？」と彼。
「昨日の仕事が、少し残っているもので。」
互いが、当たりさわりのない言葉を選んでいようでむずがゆい。男は寝間着—と言っても和服だけれど—で、どうも今さっき起きたらしい。
彼はなにか私に聞きたげに口を動かした。しかしそれに気づかず、彼の言葉をさえぎったのは私だった。
「この猫は・・・？」
「ああ…知りません。初めまして、です。」彼は猫とたわむれ続ける。
「人なつっこいですね。」

「僕の魔法かもしれませんよ？」
「……。」
「……。」
「……。」
「……冗談ですよ。」
私は冷たい視線を送る。男はバツが悪そうにそっぽを向いた。そして、いじけたように鼻歌を歌いだす。お腹をみせて甘えてくる猫にふれていた手を、私は止めた。
どうして。
彼が訝しげに私を見る。無言で交わる視線。私は、泣きそうだった。
だって…だって。
「…どうか、しましたか？」
どうか…だって？
彼はいつものように泣きボクロのある目尻を下げた。形よい唇が三日月を描く。だって。
その歌は。
幼い頃に、三つ年の違う幼なじみと作った「二人だけの歌」だったから。なくした和傘。それを彼が持っている理由。
ずきん、と、鋭い痛みが頭の奥を駆けた。その幼なじみは誰だった？
どんな容姿？
どんな性格？
どんな声？
そうだ、何で気づかなかったんだろう。ひかえめな泣きボクロ。
ふにやりと柔らかな笑みを浮かべる猫毛の幼なじみは、目の前の男とひどく似通っているのに。
過去のフラッシュバックの激流が私を押し流す。
幼なじみと私は、引越しや進路の違いという紆余曲折の末に、大人になってやっと思いの通じ合った仲だった。
私がストーカーと思い込んでいた彼は、恋人だったのだ。

「いつも小説、小説って。私のことはどうでもいいの!？」
体の芯まで冷えそうな、その年一番の積雪量だった日のことだ。書き物を本業とする彼が、原稿の締め切り直前で忙しいのは分かっていた。でも、つかいとなったのだ。
十回連続でデートの誘いを断られた。日頃から胸に溜まっていたいら立ちから、私は彼に怒鳴った。完全なる八つ当たりだ。
「すまない。また今度、ね。」
「いつもそうやって先延ばしにする。いつだって逃げるじゃない。本当は私のこと嫌いなんでしょ？」
「話を聞いて、」

「もういい。小説とお喋りでもしてなさいよ。」

彼はデートに応じてくれなかった。しかし、大切にされているという自覚も持たずに私は自分の気持ちだけをぶつけて、外へ飛び出した。

彼は、追ってこなかった。

小説の締め切りが迫っていたからだろう。しかし彼の家を飛び出す寸前に垣間見えたその顔には、葛藤の色が見えた。思い出すたびにいらいらした。

なんで来てくれないの？来てくれたっていいじゃない。

やっぱり、私より小説を取るの。

追ってくる足音がないことに、私の怒りはおさまらず、ますます燃え上がった。

無我夢中で私は交差点を走り抜けた。彼との出会いの場所である公園に向かっていた。それが間違いだとも気づかずに。

体に衝撃が走った。

雪のせいでスリップを起こしたトラックが止まりきれず、私と衝突したと知ったのは、運ばれた病院先でのことだ。

病院に、彼はいなかった。でも、その

ことにさえ気が付かない自分がいた。

強い衝撃による“記憶喪失”によって、彼との記憶だけが私の中から抜け落ちていた。

長いこと連絡がつかなくて…もう一度やり直したくて思いを伝えれば、まるで変質者を見るかのような目つきで僕を見るから。何かあったんだとは思っていたんだけど。」

全てを話した後、彼は頬をかく。そして、どこか愛おしげに私の頭を撫でた。「怒っているかと思えば、僕の送った指輪をつけて幸せそうに笑っているし、おかしな夢でも見ているかと思った。」

「…ごめんなさい。」

一年近く彼を独りにしてしまった。

泣きじゃくる私を宥める彼の手は、やはり落ち着くもので。

「君は何も悪くない。あの時追いかけてなかった僕のせいだよ。」

彼は、ふいっと視線を持ち上げた。

「…僕の家においで。」

荷物はそのままに置いてあるから。

彼の言葉に頷けば、彼は今までで一番の笑みを浮かべた。

「おかえり。…遅かったね。」

「……ただいま。」

それから一年と少し後のことである。

「また締切？もういい、私実家に帰る。一生。二度ここに来ない。」

「あ、ちょっと…。」

女は勢いよく立ち上がる。

えんじ色の座布団を引っつかんだかと思うと、ひ弱そうな色白の男に、力をこめて投げつけた。座布団は、男の顔にクリーンヒット。

そして女は足音高く、玄関から外へ飛び出して行く。

「…もう、今日は雪だっていうのに…。」

一人、残された着流しの男は、マフラーとダッフルコートを持った。急いで下駄に足を通す。女を追って、自分は上着も着ずに家を駆けだした。

男の部屋のちゃぶ台の上。そこには、編みかけの小さな靴下が彼らの帰りを待っていた。

山田さんの喜びの声

幼い頃から、自分の書く物語の主人公になるのが大好きな子で、中学生になるまでずっと、小説サイトに投稿していました。しかしなかなか読んでもらえず、落ち込んでいました。だから、今回このような素晴らしい賞に選んでいただき、本当に嬉しかったです。まだまだ未熟な私ですが、少しでも認められたように感じられ、他のことにおいても、諦めずに続けることの励みになりました。これからも、何事にもチャレンジ精神を持ち、頑張りたいです。

【ショートショート部門優秀賞】 学校

関西大学第一高等学校 1 年 石川玲子

20XX 年。時代は進み、車も空を飛べちゃいます。また、学校も進化を遂げ、家庭でのテレビ授業が主流になり、登校するのは面談、テスト、ノート提出の時だけです。

ヒカルくんは、今日も家で授業を受けています。先生が言いました。「明日からテストがはじまります。提出用ノートを持って、8 時 30 分までに席についておきなさい。」残念なことに、ヒカルくんは明日お友達と遊ぶ約束をしていました。ヒカルくんはどうしても遊びたいので、サボれないかと考えました。そして、お向かいにある研究所のおじさんに頼んで、自分そっくりのロボットをつく

ってもらうことにしたのです。

「注意事項が 3 つあるんだ。よくお聞き。1 つ目、この子を使わない時は電源をおとす。2 つ目、この子がロボットだということを誰にも言ってはいけない。3 つ目、この子が外に出ている時、お前は家の中にいなくてはならない。同じ人間が 2 人もいるなんておかしいことだからね。頼んだよ。」

家に帰ったヒカルくんは、さっそくロボットの電源をつけてみることにしました。ピッ。「デングゲンガハイリマシタ。ナニライタシマショウ。」本当に僕みたいだ。感動し、ヒカルくんは、「明日、僕の代わりに学校に行ってテストを受けてほしいんだ。」と言いました。

次の日、ヒカルくんはおじさんの言葉を思い返していました。ロボットが外にいるなら僕は遊びに行けないじゃない

か。んー。まあいいや。遭遇しなかったらいいんだもの。そう思ったヒカルくんは外に出てしまったのです。

その日の夕方。ヒカルくんは遊び疲れ、トボトボ帰っていました。そうすると、前から自分と同じ姿をしたロボットが歩いて来たのです。しまった、と思った時にはもう遅く、ロボットと目が合ってしまった。どうしようか悩みながら家に帰ると、ロボットはまだ帰っていませんでした。ヒカルくんは恐くなってベッドにもぐり込みました。

次の朝ヒカルくんは学校に行くため、身仕度をして鏡の前に立ちました。すると、首の辺りに赤いスイッチがありました。「エッ…。」「今日から君がロボットだよ。」鏡の向こうで「ヒカルくん」が笑いました。

石川さんの喜びの声

このような素晴らしい賞をいただけるとは思っていませんでした。今まで文章を書くことは好きでしたが、得意ではないと思っていたので驚きと嬉しさでいっぱいです。これを機会に、文章を書くことにもう少し積極的になろうと思います。

賞をいただいた物語は私が幼い頃からずっと頭の中にありました。自分で考えたのか、夢で見たのかなどは覚えていません。内容もっとも単純で、主人公の周りの環境などは文章化する時に思いつきました。文章を書いてとても楽しかったです。このような機会を与えて下さってありがとうございました。

【ショートショート部門優秀賞】 時計

関西大学高等部 1 年 佐藤菜花

雨がしとしとと降る、薄暗い日だった。

町の隅にあるマンションの一部屋に男はいた。マンションは古く、雨のせいで遠くから見るとそこに存在することすら疑うほどだった。男は雨だというのに開け放された窓のそばの椅子に深く腰掛けていた。

「ああ、これも運命なのだな。」

薄暗い窓の外に目を向け、その男は小さくつぶやいた。今まで成功し続け、これからこのまま発展していくだろうと思われていた企業が突然倒産し、何もかも失ったのである。大きい家はもちろん、お金になるものはすべて売ったが、それでも損失の穴を全部埋めることはできなかった。他人の力を借り、落ち着いたころには周りにはもう何もなかった。外を見ていた視線をふと下に向けると、赤い傘をさした女が一人、コツコツと履いているヒールを鳴らして歩いているだけだった。

『・・・・・・・・。』

窓から目を離し、狭い部屋の中を見た。狭いといっても何もかもを売ってしまった今日では逆に広々としているぐらいだ。部屋を見る目がある一点でとまった。時計だった。

その壁に掛けられた時計は、縦 1.5 メートルほどで振り子のついたレトロ風のものだった。企業が成功し徐々に波に乗り始めたときに、公園に荷台で変わった家具や食べ物などいろいろなものを売りにきていたらしい商人から買い取ったものだった。

これを売らなかった理由は、持っている時計の中で一番安値だったというのもあるが何よりも、まだ動いているからだ。何年も前に買ったそれは、一度も故障したこともなければ、止まったこともなかった。ただ一定のリズムを繰り返し、時を刻んでいた。

やつれ顔の男はその時計に引き寄せられるかのように椅子から立ち上がり、気づくと時計の前にいた。

「やり直せるならどんなにいいだろうか。」

時計のほこりをスーッとぬぐいながら、買ったときのことを思い出していた。企業に成功し喜んでいたあの頃が遠い昔のような気がした。

すると突然、何を思ったか男は針を 30 分ほど前に戻した。

振り子がびたっと止まったかと思うとぼーんぼーんという今まで耳にしたことのない音が鳴り、

【！？ いったい何が起って・・・・！！】

時空が歪むかのように部屋がぐにやりと歪みだした。

しかし気づくとそこにはただもとの通り普通に部屋があり、男も時計の前にいた。

「さっきのは何だったんだ・・・・？」

部屋を見渡しても特にこれといって変わったことはなく、もちろん動かした時計の針が 30 分前になっていた。ただ変わったというよりも不思議に思ったことは、さっきぬぐったはずのほこりがまた積もっていたことだ。またというよりもぬぐう前に戻ったようであった。

「フッ、ついに頭もおかしくなってしまったのかな。」

元氣なく笑いながら男は再び椅子に座り、まだ当たり前に降っている雨の外を見た。

しばらくぼーっと眺めていると、赤いものが目の端にちらっと入った。それは見覚えのあるあの赤い傘だった。「ん？なんでまた・・・・」

前と同じように、女はコツコツとヒールを鳴らしながら歩いていった。

何か気づいたか、男は椅子に座りなおし手をあごにあてて何か考えているふうだった。

そしてぱっと頭を上げたかと思うと、立ち上がり時計の方へ歩み寄り少しためらいながら針をゆっくり、ゆっくり回した。

すると男が予想していた通り、振り子が止まりぼーんぼーんと音が鳴り周りが歪み始めた。

そこは、売ったはずの大きな家だった。

「なるほど、そういうことか。」

男は鏡の前に立った。少し若返った男がそこにはいた。カレンダーを見てみると、企業が倒産する一ヶ月前ほどだった。「これでやり直せばあんなことには・・・・」

少し若返った男は、次は失敗することのないように慎重に仕事を進めていった。しかしまたもや倒産寸前に追い詰められた。

「ふむ、そう簡単にはいかんか・・・・仕方ない、もう一度だ！」

男はまたぐるぐると時計の針を回した。

だがまた失敗を回避することはできなかった。

「くそっ！なんでだ？もう一度！もう一度だ！」

その後も何度も針を回しやり直そうとするも、うまくいくことはなく、そのたびに男は気が狂ったかのように時計をまわしていた。

ある日、あまりにイライラしていた男は時計の針を思いっきりぐるぐるんと何回もまわしてしまったのである。部屋はそのままだったが、いつも目の前にあったあの時計がなくなっていた。

「！！しまった！！！」

男はすぐにカレンダーを確認した。日付は企業がちょうど成功してから少ししか経っていなかった。「買う前に戻ってしまったのか、ならまた買えばいい。ちょうどあの商人に聞きたいこともある。」上機嫌になった男はあのとこのように時計を買うため、公園へむかった。しかしそこに商人はいなかった。いくら待てどもいっこうに現れる気配はなかった。日を間違えたと思い、翌日もその翌日も公園へ行ったが商人が現れる気配はなかった。

「なんてことだ！これではもうやり直せないではないか！？」

時計がないこと以外は何も変わらず、淡々と時は過ぎていった。もちろん運命は変わることなく・・・・

そして今、雨に消されそうなほど古びたマンションの一部屋で孤独な男は一人、椅子に座り外を眺めていた。

佐藤さんの喜びの声

「現実とはただ一つの次元にすぎないが、架空の世界は多彩であり、そこから現実を見直すこともできる。」これはショートショートを創作した星新一氏の言葉である。彼の描く作品はユーモアがありながら、私たちに常識のあり方を問い直すことを求める。そして新たな行動に向かわせてくれる。今回この作品を書きながら、そうであつたらいいなという世界を想像できたことはわずかな時間ではあつたけれど、自分のあり方を問い直すことになった。これから自分の思い込みを疑うもう一つの目をもちたいと思う。

【ショートショート部門特別賞】 小さなハプニング 伊丹市立伊丹高等学校 2年 爲あゆ美

8月31日午後10時32分、僕は一人自室の机に向かっていた。

夏休み最終日であった今日この日を、1分1秒余すことなく娯楽に使った僕は、今できる範囲で自分にとっての悦の限りを尽くした。毎年夏休み最終日をこうして浪費することに決めている僕に抜かりは無く、すべての課題は7月の時点で終わらせていることが毎年のことだった。

しかし今年ばかりは違った。生真面目で何事にも完璧主義の僕が、普段のように翌日の学校の仕度をしていたところ、通学鞆の底に作文用紙がわずかに覗いているのを発見した。無造作に折り畳まれたそれが僕の目に入って来た時、僕は一瞬冷やりとした。なんということだ。この言葉がそのまま口を突いて出てしまう程に、僕の心臓は大きく跳ね上がったのだった。

その作文用紙には確かに見覚えがあった。おそらく何か特別な課題であったはずだ。その時、「各自、募集要項に従ってショートショートを創作し、提出なさい。」という国語の教科担任の声が脳内で繰り返し再生された。首筋に冷たい汗を感じ時計を見ると、秒針はすでに午後9時を回っていた。今年に入って最大のミスをしでかしたと、目の前が真っ白になった。

そんなことがあってから、かれこれ1時間以上、こうして机に向かっているわけである。しかし一向に筆は進まない。それどころか冒頭の一言目さえ思いつかない。大人しく机に向かつてはいるものの、鉛筆などは、作文用紙に氏名を記入するのに使ったきり、机の上に転がし

てある有様である。

そんな課題は適当にどこからか他人の作品をマネて来て、それなりのものを提出すればよかろうと思う者もいるかもしれない。しかし僕にはそんなこと到底できるはずもない。いかなる課題であっても、答えを写してなあなあで終らせることなど許せないのである。不思議に思うかもしれないが、こういう性分なのである。

そもそも僕は、決して作文が苦手だから書けないわけではないのである。寧ろ僕は国語全般が昔から得意であって、文章を書いて披露すれば、必ずと言っていいほど両親にも教師にも褒められたものだった。そんな調子であったからこの課題の説明を聞いたとき、少しか期待に胸が踊った。自分の自慢の文章力を披露して、華々しい評価を受けることができるのではないかという、淡い期待にである。1ヶ月半という十分すぎる時間の中で、自分の納得のいく作品の構成を、ゆっくりと練っていかうと考えていたのである。

しかし、今となってはそれもできなくなってしまった。この1ヶ月半、一度たりともこの課題のことを思い出すがなかった自分を、ただただ恨むばかりである。時計を見ると午前0時を回っていた。

あれから更に時間が経過したが、全くもって課題は進まない。先ほどよりは、題材やアイデアといったものは豊富に出てくるにはなったが、ショートショートを考えるうえで最も大切なもの、オチというものに手こずっているのである。どんな物語を考えてみても、オチが上手く付かない。僕には、決定的なオチだけが不足していた。

眠気ですとうとう意識が朦朧として来て困った。ここで妥協するわけにはいかないという意地と、早く仕上げて眠って

しまわなければ明日の授業に支障を来たすのではないかとあせりとが混ざり合って頭をひねればひねるほど何も考えられなくなっていった。

次第に夢うつつになり始めた頃、僕はふっとあるオチを思いついた。最初は、なんと苦しまぎれでくだらないオチだろうと思って、それを使うつもりはなかった。しかしそのオチ、考えれば考えるほど、なかなか味があって面白く思えて来た。

そのオチを思いついて以来、筆は面白いほどすらすらと進んで、なんだか愉快的な気分さえなってきた。

そうして思いつくままに筆を走らせ、最後の一字を書き上げたとき、窓の外はもう薄ら明るかった。結局一睡もできずに夜を明かしてしまったが、その価値があった... いやそれ以上の出来のショートショートが完成した。

内容は、とある自信過剰すぎる大財閥の跡取り息子が大変なハプニングに巻き込まれるというものなのだが、その結果には想像を絶するオチが待っているのである。端的でしかインパクトも申し分ない超大作に仕上がった。自分で言うのもなんだが、ショートショート作家として名高い星新一氏の作品と並ぶほどの作品に思える。これほど大きなスケールの壮大なショートショートが未だかつて存在したのだろうか。

僕は実に清々しい気分で、募集要項に改めて目を通していた。その時、再び僕の目の前は真っ白になった。

『募集要項』

『テーマ：小さなハプニング』

爲さんの喜びの声

この度はこのような賞を頂き、本当に嬉しく思います。

全く構想を立てずにこの作品を書き始めた当初は、話の終着点がこんな形になるとは、自分でも思ってもみませんでした。

思いつくままに自由な表現で書き上げたこの作品が、結果的にこのような賞を頂けたことで、創作にとっての遊び心の大切さを、改めて実感することができました。

本当にありがとうございました。

いかがでしたか。どの作品も個性があふれ、味わい深いものです。作者である高校生のみなさん、ご指導にあたられた先生方に心からの敬意を表します。「文章を書く」ということは、決して楽な行為ではありません。程度の違いこそあれ、さまざまな苦しみを感じられたことと思います。しかし、それ以上に完成したときの達成感は大きかったのではないのでしょうか。そして、手をかけた分だけ、完成した作品を誰かに読んでもらいたいという気持ちになったのではないのでしょうか。

本コンテストを通じて、みなさんは書く楽しさと発表する楽しさを味わわれたことと思います。この経験によって、文章を書くという行為を見つめ直してもらえたら幸いです。なお、受賞作品の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきました。掲載した文章は、ほぼ原文通りであることを書き添えておきます。

最後になりましたが、今回のコンテストに関わってくださったすべての方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。

「考動力」作文コンテスト・高校生の部・表彰式の様子

平成 26 年 3 月 19 日（水）、関西大学第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。受賞者のみなさん、各高校の先生方にご参列いただき、ありがとうございました。

表彰式は、審査員の紹介に始まり、関西大学教育開発支援センター長の田中俊也教授による表彰状と賞品の授与、祝辞、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

田中教授は、受賞者一人一人に向けて作品の講評を述べられました。受賞者のみなさんは、それをたいへん熱心に聞いておられました。



表彰式の様子は、関西大学のホームページのトップページ・トピックスにも掲載されました。
(http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/2014/03/post_883.html)



みなさん
おめでとうございます！

関西大学教育推進部・ライティングラボ

〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学第 1 学舎 1 号館 5・6 階

Tel 06-6368-1411 E-mail wlabo@ml.kandai.jp

URL <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>